薬物依存の受刑者に対するグループワークとロールレタリングを用いた心理的支援

岡本　茂樹[i]

薬物依存の受刑者に対して，認知行動療法をベースとした「薬物依存離脱指導」が行われるが，殺人を犯すと「被害者の視点を取り入れた教育」を実施することとなる。本研究の目的は，殺人未遂を犯した薬物依存の受刑者に焦点を当てて，本音を表現することを主眼に置いたグループワークとロールレタリングを取り入れた「被害者の視点を取り入れた教育」のプログラムの有効性を検討するところにある。受刑者は，グループワークで人とつながることの大切さを実感するとともに，ロールレタリングで兄や父親などに対して否定的感情を吐き出すことによって，自分の寂しさを紛らわすために覚せい剤を使用していたことに気づいていく。その過程で，自分の心の痛みに気づいた受刑者は，罪の意識を深め，最後は人に頼って生きることの大切さを身に付けている。本事例は，薬物依存の受刑者に対して，薬物依存離脱指導の方法として，認知行動療法以外のアプローチの有効性を示唆している。

キーワード：薬物依存の受刑者，被害者の視点を取り入れた教育，ロールレタリング　グループワーク

Ⅰ　問題と目的

2009年の夏に起きた元アイドルの芸能人の覚せい剤使用の報道をきっかけに，覚せい剤の問題は世間の注目を浴びるようになった。しかしこの事件が起きる以前に，すでにわが国では，覚せい剤の乱用問題が，第二次大戦後から50年余り過ぎた現在に至るまで長きにわたって続いている。そして，あらゆる事件のなかで最も再犯率の高い犯罪が，覚せい剤の再使用なのである（法務省，2012）。

いうまでもなく，覚せい剤を再使用した受刑者に対して，刑事施設において早期に処遇を開始することが効果的である（法務省，2005）。処遇方法について，Andrews et al（2010）は，覚せい剤使用者の再使用者に対して認知行動療法による介入が有効であると報告しており，日本でも認知行動療法をベースとした「薬物依存離脱指導」という特別改善指導のプログラムが用意されている（法務省，2006）。

しかし，覚せい剤を使用するに至るまでの受刑者の背景，生育歴や個々の性格はさまざまであるだけに，多様なプログラムを開発する必要があると考えられる。斎藤（2011）は，うつ病の治療に対して認知行動療法が一般的な手法として用いられていることを問題視し，「この治療法の限界は，やはり『適応』，つまり向き不向きがかなりある，という点ではないかと思います。端的に言えば，治療意欲がしっかりしていて持続力もあるケースには向いていますが，治療意欲が不安定な場合は効果が上がりにくかったり，治療そのものが中断してしまいやすい，といった傾向があることです」と指摘している。また，薬物を使用する者は「人に迷惑をかけなければ，

i　立命館大学産業社会学部教授

薬物でどうなろうとその人の勝手」という価値観を持っており（松本，2010a），治療意欲に乏しい受刑者が多い。こうしたさまざまな治療上の困難を伴うだけに，覚せい剤再使用の受刑者に対する処遇として，認知行動療法をベースにしたものだけでなく，多様なプログラムを開発することは喫緊の課題である。

一方，覚せい剤を使用した者が殺人を犯すケースは少なくない。覚せい剤の使用よりも殺人の方が罪は重くなるので，当然刑期は長くなり，L（Longの略で，執行すべき刑期が10年以上）という指標の付いた刑事施設に受刑者は送られる場合が多い。そうした刑事施設では受刑者に対して，薬物依存離脱指導ではなく，生命犯に対する特別改善指導である「被害者の視点を取り入れた教育」が実施されることになる。

これまで筆者は，LB指標（Bは犯罪傾向が進んでいる受刑者に付けられる指標）の受刑者が収容されている刑事施設において，「被害者の視点を取り入れた教育」を実施しており，「加害者の視点」で本音を話し合うグループワーク（以下，GW）とロールレタリング（以下，RL）を用いたプログラムが受刑者に罪の意識を持たせるとともに認知面の修正にも効果があることを実証している（岡本，2012a）。そのうえで，今回のプログラムには，罪の意識を深めることを目的に，あらたに「被害者の視点」を用いた課題を取り入れている。本研究では，覚せい剤の常用がきっかけで殺人未遂を犯した受刑者が，筆者のプログラムを受講することによって覚せい剤を断ち切り，再犯しない意識を持つまでの過程を追跡している。本事例を通じて，認知行動療法以外のプログラムの効果を検証することが本研究の目的である。なお，事例の公表に当たって，刑事施設と受刑者の許可を得ている。

Ⅱ　事例とプログラムの概要

１．事例の対象者

対象者は施設側が「出所が近いこと」を条件に選別した５名の受刑者である。自主的ではなく強制的に参加させられているため，授業開始当初の受刑者のモチベーションはけっして高くはない。なお，年齢，罪名と残刑は表１の通りである。

本論では，覚せい剤常用者で殺人未遂を起こしたAに焦点を当てることとする。以下，Aの生育歴と犯罪に至る経緯を簡略に記す。

Aの生育歴：自営業を営む両親の下，男ばかりの兄弟４人の末っ子として生まれ，生計は裕福であったという。中学に入学する頃から不良交友をするようになり，シンナーの吸引が始まる。高校へ進学するが授業についていけず退学し，家業を手伝うことになる。その頃から覚せい剤を使用するようになり，密売人である暴力団員との交際が始まる。その後，統合失調症と診断され，入退院を繰り返す。30歳前半に景気が悪化したため，家業をたたみAは無職となる。40歳半ばに，覚せい剤使用で執行猶予。仕事をしない状況が続くなか，再び覚せい剤の使用が始まり，かつての暴力団員から購入するようになった。

表１　対象者の年齢，罪名と残刑

対象者	年齢	罪　　名	残刑
A	50歳代前半	殺人未遂・覚せい剤取締法違反	約２年
B	50歳代前半	危険運転致死罪	約２年半
C	40歳代後半	殺人	約２年８ヶ月
D	50歳代前半	殺人未遂	約３年
E	40歳代前半	強盗殺人未遂	約１年10ヶ月

犯罪に至る経緯：暴力団員から覚せい剤を報酬に殺人を依頼される。当初は断っていたが，覚せい剤欲しさに承諾。包丁で切りつけたが，負傷を負いながらも被害者は命からがら逃走したため，殺害には至らなかった。

2．プログラムの期間・回数

実施期間はX年５月～X＋１年３月の11ヶ月間で，授業は７回行った（１回の授業は90分で，最終回だけ60分の公開授業）。また，第２回目の後とプログラム終了後に個人面接を行い，最後の授業終了後にアンケートを実施した。アンケートでは，「プログラムの役立ち度」や「罪の意識の変化」などを７段階で評定させ，自由記述の質問も行った。

3．プログラムの内容

GW の内容とノートの課題を表２に示す。交換ノートの方法として，授業の最後に筆者（以下，Co）が課題を出し，受刑者が書いた文面に返信を記して返却する形にした。

Ⅲ　結果

A の言葉・文面は「　」で，Co の言葉・文面は〈　〉で記載する。

＃１：第１回目の GW と交換ノート（X 年５月16日）

最初に「後出し負けジャンケン」を行う。ジャンケンで後出しして「負けることが勝つ」というゲームである。結果として後出しして勝つことになり，全員から笑い声が出る。ここで Co は，「勝たないといけない」といった価値観の刷り込みが問題行動（犯罪）を起こす場合があることを伝えると，数人は意外な表情を浮かべる。次に，自己紹介として，

表２　GW の内容とノートの課題

回（年月日）	GW の内容	ノートの課題
＃１ （X 年５月16日）	１．アイスブレイク：「後出し負けジャンケン」 ２．自己紹介（自分の長所・短所） ３．「万引きをした女子高生 F 子の反省文」を用いた GW	１．授業の感想 ２．「今，考えていること（悩んでいること）」
＃２ （X 年６月13日）	１．「自己開示と自己受容」の GW ２．覚せい剤使用の芸能人 G の謝罪文を用いた GW	１．授業の感想 ２．「幼いときのこと」
＃３　個人面接（X 年８月８日）A への課題：RL「私から兄へ」		
＃４ （X 年９月13日）	１．虐待をした事例を用いた GW ２．感情表現を促すワーク１	１．授業の感想 ２．RL「幼いときの私から父親・母親へ」
＃５ （X 年10月24日）	１．「いじめ」の事例を用いた GW ２．感情表現を促すワーク２	１．授業の感想 ２．「素直な感情を出せなくなった理由」
＃６ （X 年11月14日）	１．リフレ―ミング ２．殺人事件の事例を用いた GW	１．授業の感想 ２．RL「私から大切な人へ」
＃７ （X＋１年１月26日）	１．友人からの依頼の断り方の GW ２．被害者に関する GW	１．授業の感想 ２．RL「私から被害者へ」
＃８ （X＋１年２月27日）	１．非行少年の作文を用いた GW ２．被害者の視点を取り入れたロールプレイ	１．全体の授業の感想
＃９　個人面接（X＋１年３月10日）		

自分の長所と短所を話してもらう。Aは「長所はなくて，短所はくよくよと悩んでしまうことです」と言う。そこでCoは〈悩むことは，何ごとにも慎長になることで長所の面もありますね〉と言うと，Aは驚いた表情を浮かべる。最後に，「万引きをした女子高生F子の反省文」を取り上げる。Coは，「F子の母親は過干渉で父親が権威的」と説明し，次の反省文を読み上げる。「（前略）今まで自分に甘く，お店の人，先生方，親に迷惑をかけ，反省しています」。感想を求めた後，〈F子はどんな気分で毎日過ごしていたと思いますか〉と問うと，Eは「こんな家だと息苦しいだろうな」と言い，Bは「また万引きしますね」と続ける。２人の発言を受けて〈親への不満があったかもしれませんね〉と言い，〈反省する前に，なぜ万引きしたのかを考えることが大切〉と伝えると，A，BとEはうなずく。

「授業の感想」：「今回の改善指導を受けることで，何か一つでもいいから人間として成長できることを身に付けられるように毎回の授業を大切にしたいと思っています」

Coの返信：覚せい剤を使わないために，Aが一つでも多くのことを学べるようにCoも頑張って授業をしたいと伝える。

「今，考えていること」：「薬を止めなければ刑務所で過ごした10年間の努力は何もならない」と覚せい剤を断ち切る思いを記した後，「残りの人生は短いですが，また職人の道を歩んで行きたいと思っています」と出所後の生き方を書いている。

Coの返信：覚せい剤を止める決意があることを称えたうえで，〈出所後に『職人の道』に就くことは『Cの夢』ですね。その日が来ることを願っています〉と返信する。

＃２：第２回目のGWと交換ノート（X年６月13日）

「自分の欠点や課題」を語り，その発言に対して他のメンバーが肯定的な言葉で応答する。これによって，受刑者は自分の否定的な面を開示し受容される体験をする（「自己開示と自己受容」のGW）。Aは覚せい剤を使っていたことを自ら明かし，「自分に自信がありません」と言うと，数名のメンバーから「私も自信はありませんよ」との言葉が返ってくる。すると，それまで表情の硬かったAが初めて笑顔を浮かべる。次に，覚せい剤を使用した芸能人Gの謝罪文を読む。「自分が弱かったから覚せい剤を使用した」の一文を捉え，〈『自分が弱かった』とありますが，では『強い人間』とはどんな人ですか〉と問いかけると，Bは「我慢強い人」，Eは「自分の意見を曲げない人」と答える。２人の意見を受け入れつつも，〈こうした考え方には自分に無理をしたり他者の援助を受けなかったりする面もありますね〉と言うと，Aは黙ってうなずいていた。

「幼いときのこと」：「私は両親の愛情を受け，何不自由なく愛されて育ちましたが，中学の頃から悪いグループをつくり，未成年なのにタバコを覚え，一人前の男と認めてもらいたくなりました。中学の後半にはシンナーも覚え，いい気分でツッパってました。高校になってから覚せい剤に手を出し，その影響で精神科の薬を飲み始めました。若い頃には『精神科，精神科』とバカにされたり『頭がおかしい』と言われたりして，ハンディを持った気持ちになって落ち込みました。友人にも馴染めず，ますます薬の魅力に負けて，心身ともにボロボロになっていきました。（中略）病院でよきパートナーと出会い，夢のまた夢と思っていた結婚をしました。しかし結婚生活も１，２年で破局。それからは，再び薬にどっぷり漬かっていき，トントン拍子で悪の道へと進み，今この施設にいます」

Coの返信：これまでの人生のことを正直に書いてくれたことに謝意を記し，〈たくさんつらい思いをしてきたのですね〉と受容した後，Aの文面の書き出しに注目し〈Aさんは両親から『何不自由なく愛されて育った』と書いてありましたが，Aさんの心は当時，満たされていたのでしょうか〉と質問を投げかける。

＃３：個人面接（X年８月８日）：「薬の力を借りないで，生活したい」と素直な思いを述べた後，事

件のことに触れ，「薬の誘惑で（殺人の依頼を）断れなかった。そのときは人を殺すことを悪いとは思っていなかった」〈なぜ，悪いと思わなかったのですか〉と問うと，「男義……みたいな気持ちがありました」と応じる。Coが〈そのとき断っていたら，どうなっていましたか〉と質問すると，少し考えてからAは「多分，つまはじきにされたと思う」と答え，次第に幼少期の頃の話になる。Aは「父と母がいつも喧嘩ばかりしていた。母は優しかったが，軍隊上がりの父は自分に厳しく，何か言うと『不満を言うな』と押さえつけられていた」と言う。さらに，薬を使い始めてから，一番上の兄から『お前はおかしい』とよく言われた」と兄に対して腹立たしい思いがあることを告げる。Coは，幼少期に抱いていたAの寂しさや苦しみを受けとめた後，親に対するRLの課題は第3回目の授業の後に出すことにしていたので，まずは「私から兄へ」のRLを書くことをAに求める。

第1信RL「私から兄へ」：「兄貴。私はいつもお母さんといっしょでしたね。お母さんに甘えっぱなしで，いつまでたっても大人になれなかった。そのせいか，兄貴は私に厳しく当たり，精神科に初めて入院した際には，『一生，入っとけ』と言ったよね。私に対して，なぜそんなに当たるのか分からず，感情のまま頭ごなしで言葉を出す兄貴が大嫌いだった。私は末っ子なので何一つ発言力もなく，何一つ男らしさを出せない私はつらかったよ。『こんなに厳しくしやがって』と嫌な気持ちがふくらみ，『なにもかも火事でなくなればいい』と思ったこともある。兄貴に薬を使っていることがバレたとき，力いっぱいコーラのビンで頭を殴られたときのことは忘れないよ（以下，省略）」

Coの返信：辛い過去を振り返ってRLを書いてくれたことへの謝意を記した後，Aが母親を愛していたのと同時に兄から受けた言動にひどく傷ついていたのではないかと伝える。

＃4：第3回目のGWと交換ノート（X年9月13日）

ホスト遊びで幼児を遺棄した母親の虐待事件を取り上げる。その際，母親がブログに書いた内容（生き辛さがつづられている）を紹介する。〈ブログを読んで，事件当時母親はどんな気持ちだったと思いますか〉と問うと，Eが「ホスト遊びで気を紛らわせていたのかもしれない」と話す。Eの言葉を受けて，Coは〈ホスト遊びは生き辛さを感じていた彼女を『救っていた』という見方もできますね〉と伝えたうえで，〈辛い感情を抱え込むのではなく，外に出すことが必要です〉と言って，「感情表現を促すワーク1」を実施する。具体的には，「最近，うれしかったこと，悲しかったこと，辛かったことなど」から一つテーマを選び，ペアになって対話をする。例えば，一人が「私は……が辛かったです」と言うと，相手は「それは，とても辛かったですね」と応答するのである。「苦手だなあ」と言いながらも受刑者は感情を表現し，笑い声さえ起きる。

第2信RL「幼いときの私から父親・母親へ」：「幼いとき，私の親父は商売が忙しく，私のことはかまってくれなかった。親父はいつもお金の計算で，養育の方は全部母親まかせ。そのせいか私は『お母さん子』になっていた。一般家庭もこのような養育であると思い続けていたが，小学生のときによその家庭をのぞくと，お父さんが一体となって楽しい家庭に見えた。これが普通の家庭かと思うと，悲しくなった。お金だけの愛情なんていらない！　（中略）親父が商売でつまずいたとき，家族はどん底になり，家具や電化製品には赤紙が張られ，幼い私には何のことか分からず，怖くて寂しい雰囲気のなかで震えていた。そんな悲しい思いをさせた親父を憎んだ。（以下，省略）」

Coの返信：幼いとき，仕事で忙しかった父親に甘えられず，〈Aさんが本当に求めていたのは『お金』ではなくて，『楽しい家庭』だったことが伝わってきます〉と記し，〈貧しさのなかでAさんはとてもつらく寂しい思いをしていたのですね〉と返信する。

＃5：第4回目のGW（X年10月24日）（注：Aは

規則違反をして懲罰中だったため，課題を書く許可が下りず，授業の参加のみ）

中学時代に長年に渡って集団でいじめを受けた子どもの事例を取り上げ，〈このようないじめを受けたら，どうしますか〉と問うと，Eが「こんなことがあるのですか！　私ならやり返しますね」と言い，他の受刑者もうなずく。そこで〈この考えは，力に対して力で対抗することですね〉と確認し，〈この考え方でいると，この先どうなるでしょうか〉と続ける。するとBは「こうして犯罪は起きるんですね」と言う。Bの発言を称えた後，Aに〈他にいい方法はないでしょうか〉と問うと，「誰かに助けを求めたいです」と応じる。Aの言葉を受けてCoは「人に援助を求めることの大切さ」を伝える。最後に，「感情表現を促すワーク２」を行う。方法は，カードに「感情」を表す言葉を10個程度書いたうえで裏向きにし，一枚引いて，その感情に関するエピソードをペアになって話し合うのである。

＃６：第５回目のGWと交換ノート（X年11月14日）

最初にリフレ―ミングを行う。具体的には，各受刑者が自分の短所を書き，それを他の受刑者から長所に置き換えてもらうのである。思わぬ回答をもらった受刑者は「こんな見方もあったのか」と驚きの声をあげる。次に，「殺人事件の事例」を取り上げる。事例は，喧嘩に巻き込まれている友人を助けるため，友人を殴った相手を殺害する内容である。Eは「殴り返すとまた刑務所ですね」と言う。数名が同調するなかBが「やり返す以外，方法が思いつかなかった」と話し，あらためてCoは「逃げることの大切さ」を述べる。

第３信RL「私から大切だった元妻へ」：「（前略）結婚をしてからは，断薬でのつまずきはなかったけれど，断酒でのつまづきは幾度とあったね。そのたびにH（妻の名前）には私の嫌な姿を見せてきたね。（刑務所から出した）手紙は胸に刺さったのでしょうね。胸に刺さるというよりも腹が立ったでしょうね。怒りの思いでいっぱいだった？

電話で一言，昔言ったことがあったよね。あなたのことは忘れないとね。その言葉は私を勇気づけてくれたよ。報道で耳にした私の罪。一通の手紙。あなたは誰にも相談できず悩み，二人の子どもも悩ませたことでしょう。（中略）細く曲がりくねった道を歩き，今私は険しい道を歩いています。二人三脚でHと歩んでいたときが幸せでした」

Coの返信：元妻に対して深い愛情があったことが伝わってくると記し，〈Aさんなりに，懸命に断酒，断薬に取り組んでこられたにもかかわらず，うまくいかず，これまで言葉で言えないくらい，つらい道を歩んでこられたのですね〉と返信する。

＃７：第６回目のGWと交換ノート（X＋１年１月26日）

友人からの悪い誘いの断り方を練習させるが，受刑者は曖昧な言葉を言ってうまく拒否できない。そこで「はっきりと手短に」断る方法を提示し，全員に練習させると，皆「勉強になりました」と納得した表情で答える。次に，「被害者」について自由に語らせる。Eは被害者に対して手紙すら書くことを止められていることを話すと，Aは「被害者に対して申し訳ないことをした」と言い，Bは「反省といっても，言葉で簡単に言えるものではない」と続ける。各受刑者の話を聞いたうえで，Coは〈被害者（遺族）は加害者を許すことはないでしょう。しかし皆さんはやがて社会に復帰します。矛盾することですが，罪を背負いながらも，人とつながって社会で生活してほしい〉と告げ，「社会で前向きにどう生きていくのか」を被害者に伝える形で，「私から被害者へ」のRLを書くことを求める。

第４信RL「私から被害者へ」：「私は人を殺めようとして未遂に終わったものの，人を殺めようとした自分の罪は消すことのできないものであり，残り一生背負っていかなければならないと思っています。（中略）残り少ない命を大切にして，意味のある行いをし，亡き父母の下にまいります。そのためにも私は変わります」

Coの返信：難しい課題に取り組んでくれたこと

をねぎらうとともにAの決心を称えたうえで，〈文面にも書いてあるように，ご自身の命を大切にしてください。そのためには，モノ（薬や酒）ではなく，人に頼ることを大切にしてください〉と記す。

＃8：第7回目（最終回）のGWと交換ノート（X＋1年2月27日）

非行少年が書いた作文（過去の非行を振り返ったうえで，最後の一行に「少年院を出たら人を頼らないで自分一人で生きていきたい」と記されている）を読んで感想を話し合う。すぐに受刑者から「『自分一人で生きていきたい』と書いているところが問題ですね」との声が上がる。その応答を称えてCoは，一人で頑張ることが抑圧を生み，それが犯罪に至る過程になり得ることを確認する。次に，「被害者の視点を取り入れたロールプレイ」を行う。方法は，受刑者がペアになって加害者と被害者の役割になり，まず加害者役が出所後の思いを被害者に伝え，その後被害者役が加害者役に向かって言葉を返すというものである。その際Coは，被害者役は「肯定的な言葉を添えること」を条件とした。この条件を付け加えた理由は，「肯定的な言葉」を考えて口にすることによって，ただ謝罪するのではなく，お互いに前向きな気持ちになることを目的としている。加害者役になった受刑者は，謝罪した後RLに書いたような内容のことを語る。次に，被害者役になった受刑者は，無念な思いを言ったり，「私（被害者）のことをけっして忘れないで，二度と罪を犯さずに頑張ってほしい」といった励ましの言葉を加害者役に返したりする。「公開授業」という緊張する場でありながら，受刑者は皆集中して課題に取り組み，加害者役になったときのAは謝罪する気持ちと前向きに生きていく思いをはっきりと言葉に出していた。

「全体の授業の感想」：「全部で7回の授業。一言で言えば，心楽しく，人間として生き返る思いをさせてもらった。こんなに過去を振り返ったことはありません。兄貴への恨みつらみを書いたことも初めてで，なぜかすっきりした気持ちになりました。パートナーにも医者にも母親にも言えなかったことを正直に言えたのは先生だけです。自分自身のことをみつめることの大切さが分かりました。この改善指導で，いままでの『心の黒さ』を洗い流せました。新たな気持ちを持って，出所していきたいと思います」

＃9：個人面接（X＋1年3月10日）：あらためて今回の改善指導の感想を問うと，「GWや先生とのノートのやり取りをして，心に秘めていたことを出せました。もっと（授業の）時間が欲しかったです」と言う。自分が起こした事件について「実は，済んだことは仕方がないので，『被害者のことは忘れて，しっかり（刑務所で）務めてこい』とある人に言われました。だから，被害者への手紙を書くことは難しかったのですが，人を殺めようとしたことは一生忘れてはいけないことだと実感しました。（最後のロールプレイについて）大勢の前で謝罪の気持ちや出所後の思いを話せたことは自分でも驚き，達成感のようなものがありました」と笑顔で話す。覚せい剤の使用についてAは，アンケート結果にも書いてあるように「今考えると，寂しさや嫌な思いから逃げ出したかったのだと思います」と言う。そこでCoは「薬や酒は，当時の辛かったAさんを助けてくれたという見方もできますね」と伝えると，Aは「だから，辛いときこそ人に頼らないといけないのですね。今の私は，心温かく思いやりのある人間の大切さを感じています」と再び笑顔で応じる。

【アンケート結果】7の「非常に強く思う」から1の「まったく思わない」までの7件法で評定した結果，昨年度と比較すると，「1．プログラムの役立ち度」と「2．交換ノートの役立ち度」は変わらず，「3．メンバーへの安心感」は下がり（Cのみ「1」と回答しているため），「4．被害者に対する『罪の意識』の深まり」と「5．更生への決意の高まり」の2項目が上昇している（表3）。なお，Aの回答は，質問順に（6，6，5，5，6）である。以下，Aの自由記述の回答を紹介する。

〈「罪の意識」が深まったこと〉：「授業のなかで皆さんの取り組む姿勢や人間としての心の温かさなど

表３　アンケート結果　※（　）内は前年度のプログラムのアンケート結果

質　問　項　目	平均	SD
１．プログラムの役立ち度	6.40(6.40)	0.49(0.80)
２．交換ノートの役立ち度	6.80(6.80)	0.60(0.67)
３．メンバーへの安心感	4.20(5.60)	1.10(0.49)
４．「罪の意識」の深まり	6.20(5.60)	0.84(2.33)
５．更生への決意の高まり	6.40(6.00)	0.49(1.10)

にひかれ，罪の意識が深まりました。（覚せい剤を使用した過去を自ら振り返り）夫婦喧嘩の絶えることのない家庭の暗い雰囲気が嫌で，明かりを求めていた。幼い頃の嫌な思いがずるずると残っていて，そんな思いから逃げ出したかったのかもしれない。寂しさから逃れたかったのだと今では思います」**〈交換ノートの感想〉**：「こんなに『感情があふれ出るやり取り』をしたことは初めてでした。先生に課題を与えられると，なぜか心をさらけ出したくなりました。人間として支えられている気持ちになりました」**〈「私から被害者へ」のRLと被害者とのロールプレイについて〉**：「最後の授業は，ある意味『卒業式』みたいですが，人生の『卒業』はないと私は思いました。ロールプレイは，小心者の私が人前で話すことができ，一人の人間としてとても勇気づけられました」

なお，「『私から被害者へ』のRLと被害者とのロールプレイ」は今回のプログラムで初めて取り入れた課題であるため，他の受刑者の自由記述の回答も以下に記しておく。

「どんな言葉を書いても，それを人前で話しても，薄っぺらな言葉に私自身感じました（B)」「なんで命を奪ってしまったのだろう。人の命の重みを感じた（C)」「相手に謝ることしか頭に思い浮かばなかった。それ以上のことは，自分がしっかりと相手のことを考えて務めていくしかないと思った（D)」「被害者は常に忘れることはなく，私自身も忘れることはなく，その気持ちは私よりも被害者の方が相当に重いことを感じました（E)」

Ⅳ　考察

１．RLで本音を表現することによる自己理解と罪の意識の芽生え

覚せい剤の常用が事件を起こした原因であると思い込んでいたAは，第１回のノートの課題の「今，考えていること」に覚せい剤を止める決意があることを記している。しかし，近藤（2009）が指摘するように，「絶対に止める」という固い決意だけでは薬物依存からの回復は難しい。したがって，この時点でCoはAが「固い決意」を持っていることを称えるにとどめている。注目すべき点は，第２回のノートの課題の「幼いときのこと」のなかで，Aが「私は両親の愛情を受け，何不自由なく愛されて育ちました」と書いていることである。愛されて育っているにもかかわらず，Aは悪いグループをつくり，シンナー，覚せい剤そして殺人未遂への道を辿っている。この文面に矛盾を感じたCoは，Aには非行に走らざるを得なかった理由があると考え，個人面接でAが薬物に手を出していく過程に耳を傾けたのである。面接で，両親の不仲，父親からのしつけや兄の厳しい言動で，さまざまな否定的感情があることを語ったAは，Coの求めに応じて「私から兄へ」のRLで「感情のまま頭ごなしで言葉を出す兄貴が大嫌いだった」とありありと過去を想起し，兄への否定的感情を吐き出している。「全体の授業の感想」にも書いてあるように，初めて兄への不満を表現したことによってAはカタルシス効果を得るとともに，「自分自身のことをみつめる大切さ」さえ実感している。それまで出せなかった感情を初めて出すことがきっかけとなって，さらに自分の感情を出す意欲が生まれるクライエントは少なくない（岡本，2012b)。続く「幼いときの私から父親・母親へ」のRLでは，幼少の頃の自分の家庭の様子を思い出し，「お金だけの愛情なんていらない！」と怒りの感情を吐き出している。父親に対する不満を出せたことによって，Aが本当に求めていたものはお金といっ

た「モノ」ではなく「親からの温かい愛情」であったことに気づいているのである。

こうしてみると，Aが悪いグループをつくって非行に走り，タバコとシンナー，さらに覚せい剤を使用するようになっていった背景には，二つの要因があることが理解できる。一つは「末っ子なので何一つ発言力もなく，何一つ男らしさを出せない」（RL「私から兄へ」）ことへの反動として，「一人前の男として認めてもらいたくなりました」（「幼いときのこと」）と書いているように，Aには「背伸び」をしようとする心理（藤掛，2002）があったことであり，もう一つは「親からの温かい愛情」を得られず，薬物の吸引は満たされなかった「寂しさ」を紛らわすための「代償」となっていたと考えられる。その点で，自由記述の〈「罪の意識」が深まったこと〉のなかで，過去の嫌な思い出を書いたうえで「寂しさから逃れたかったのだと今では思います」と自己理解できていることは見逃せない。

第5回のノートの課題である「私から大切な人へ」のRLの課題で，Aは「元妻」を対象に選んでいる。文面からはAの元妻に対するアンビバレントな感情が記されている。すなわち，元妻に辛い思いをさせたことと，元妻と幸せな時間を過ごしてきたことの相反する感情が明確になっているのである。まさに，RLによる「書くことによる感情の明確化」（春口，1987）である。このように，兄，父親，そして元妻に対する思いを吐き出すことによって，Aは自分の心の奥底に苦しみや悲しみといったさまざまな感情があることに気づいていく。そうした感情は，Aが奥底に封印していた「心の痛み」を実感させることになる。そして，自分の心の痛みを実感することは，ひいては自分が殺害を起こそうとした被害者に対する罪の意識を自然と芽生えさせることになるのである（岡本，2011）。

第6回目のGWでAは被害者に対する罪の意識を口にし，課題であった「私から被害者へ」のRL（第6回のノートの課題）でも，被害者に心から謝罪する思いを書いている。第2回目の個人面接で明らかになったこととして，Aはある人から「被害者のことは忘れて，しっかり（刑務所で）務めてこい」との助言を受けていたことを告げている。こうしてみると，プログラム開始当初，Aは覚せい剤を止めることが目標であって，被害者に対する罪の償いの意識はほとんどなかったことが推察される。確かにAにとって覚せい剤を断ち切ることは重要であるが，殺害を起こそうとした「自分の罪」と向き合う必要があることはいうまでもない。その意味でも，AがRLを書いて「心の黒さ」を洗い流せたからこそ，被害者の心の痛みも理解できるようになったと考えられる。

2．Coとグループメンバーに支えられた薬物依存の受刑者に対するプログラムの効果

〈交換ノートの感想〉について，Aは「こんなに『感情のあふれ出るやり取り』をしたことは初めてでした。先生に課題を与えられると，なぜか心をさらけ出したくなりました。人間として支えられている気持ちになりました」と記している。受刑者にとって，過去の「感情」と向き合うことは，実際にはとても苦しい作業である。RLはセルフカウンセリングの一技法と考えられているが，自分の心の奥底に閉ざしていた感情と自分一人だけで向き合うことは容易ではない。竹下（2002）は，RLに取り組むための動機づけの一つとして，「少年が自分自身の課題や問題点と向き合っていこうとするときに，一緒に取り組んでくれると信頼できる支援者の存在が不可欠である」と指摘している。Coに支えられているという安心感があって，受刑者の心に自分の内面と向き合う勇気が生まれるのである。

また，Aがグループメンバーに支えられていたことも見逃せない。第2回のGWで「自分に自信がない」と語ったAにとって，メンバーに共感してもらったことが大きな励みになっていたのは間違いない。自由記述の〈「罪の意識」が深まったこと〉の理由として，「授業のなかで皆さんの取り組む姿勢や人間としての心の温かさにひかれ」たことを挙げ，さら

に２回目の個人面接で，「辛いときこそ人に頼らないといけないのですね」と語っているように，Aは「モノ」ではなく「人」に頼る生き方の大切さを実感している。信田（2009）が出所者は「人とつながれない」ことを問題視している点でも，「他者とつながることの大切さ」を実感したAだからこそ，覚せい剤という「強敵」とも縁を切ることが期待できる。

また，公開授業という大勢の前でAが「被害者とのロールプレイ」ができたことは，Aに大きな自信を与えている。松本（2010b）は，薬物依存症者は，高校を中退するなど学校生活における成功体験が乏しく，自尊感情が低いと述べている。男ばかりの兄弟４人の末っ子として生まれたAは，「何一つ発言力もなく」（RL「私から兄へ」），高校も中退している。学業についていけず薬物に走った原因の一つとして，自尊感情の低さが関係していることは否定できない。その点で，「小心者の私が人前で話すことができ，一人の人間としてとても勇気づけられました」（〈「私から被害者へ」のRLと被害者とのロールプレイについて〉）と自尊感情が高まったことは，Coを含めたグループメンバーによる「人とのつながり」がAの背中を後押ししたと考えられる。浜井（2009）は“人が立ち直るために本当に必要なものは，それをサポートし，導いてくれる友人や家族であり，深く反省し，悔い改めるだけでは，人は立ち直れない”と人が更生するために必要な条件を指摘している。

認知行動療法をベースにして薬物依存者の支援に当たっている松本（2008）は「認知行動療法という枠組みが薬物依存者との治療関係を築きあげる際のコミュニケーションツールになることによって，いわば間接的な治療効果を発揮している」と述べている。松本の指摘は，有効な心理技法を用いることの前に，何より治療者とクライエントとの間に築かれた関係性が，クライエントの立ち直りを支援するための条件であることを示唆している。そして，ここにこそ，認知行動療法以外の他の心理療法の導入の可能性があると考えられる。その一つが，本事例に活用したRLであり，その基礎となるものは「本音を言える場」として機能していたGWである。竹下（2001）は，薬物依存離脱指導を例に挙げて，「なぜそれをしたいのか」という本音について考えていかない限り薬物への依存を断ち切ることはできないと指摘し，「本音を表現することによって本来の自分の問題に初めて直面できる」と述べている。Coとグループメンバーに支えられて本音を出せる「場」を設けたプログラムは，覚せい剤常用者にも有効であることが，本事例を通じて示唆することができる。

なお，前年度のアンケート結果と今回の結果を比較すると，「プログラムの役立ち度」の平均値は6.40と変わらず高く，とくに「『罪の意識』の深まり」は6.20，「更生への決意の高まり」が6.40と，２つの質問項目がより高い数値となっている。５名ずつの比較なので単純に判断できないが，今回のプログラムの方が受刑者の更生により効果があったことが理解できる。この変化は，全員の受刑者の自由記述の回答をみると分かるように，前年度のプログラム（岡本，2012a）にはなかった「『私から被害者へ』のRLと被害者とのロールプレイ」を取り入れたことが関係している可能性がある。「加害者の視点」に「被害者の視点」を加えることで，より効果的なプログラムになったと考えられる。

Ⅴ　今後の課題

いうまでもなく，覚せい剤の再使用は，自分の意思だけでは解決できない種類の犯罪である。そのためには出所後に社会がAを受け入れることが欠かせない。A自身が薬を「止める」のではなく「止め続ける」という意思を持ち続けるのと同時に，Aを理解して支える周囲の人間に対する働きかけも必要である。刑事施設でできる支援とは別に，社会における覚せい剤使用者に対する支援のあり方も検討すべき課題である。

次に，本プログラムに関していうと，薬物からの依存の治療には認知行動療法が一定の成果を上げて

いるため，この治療法にRLを併用したプログラムも有効であると考えられる。今回のプログラムの内容をより精査することと並行して，今後も覚せい剤使用の受刑者の処遇に対応できる多様なプログラムを開発していきたい。

［引用文献］

Andrews DA, Bonta J (2010)：*The Psychology of Criminal Conduct, Fifth Edition*, LexisNexis, p288.

浜井浩一（2009）：２円で刑務所，５億で執行猶予　光文社　p224.

春口徳雄（1987）：ロール・レタリング（役割交換書簡法）創元社　p34.

法務省（2005）：法務総合研究所研究部報告27，日本における薬物乱用者処遇の現状と課題，p322.

法務省（2008）：改善指導の標準プログラムについて，別紙１.

法務省（2012）：犯罪対策閣僚会議，再犯防止に向けた総合対策，３.

藤掛明（2002）：非行カウンセリング　金剛出版　p17.

近藤恒夫（2009）：拘置所のタンポポ　双葉社　pp11-13.

松本俊彦（2008）：薬物依存者の社会復帰のために精神保健機関は何をすべきか？　日本アルコール薬物医学会雑誌，43（３），176.

松本俊彦（2010a）：思春期における心の問題　日野原重明・宮岡等（監修）　飯田順三（編）　脳と心のプライマリケア４，448.

松本俊彦（2010b）：物質依存症―治療戦略に役立つ生活歴，現病歴，家族関係　精神科治療学25（11），1490.

信田さよ子（2009）：見逃せない父の暴力　池谷孝司（編著）　死刑でいいです　共同通信社 pp76-77

岡本茂樹（2011）：受刑者支援にエンプティチェア・テクニックとロールレタリングを導入した面接過程　ゲシュタルト療法研究，１，19-27.

岡本茂樹（2012a）：グループワークと交換ノートを用いた殺人を犯した受刑者に対する心理的支援　心理臨床学研究，30（４），559-570.

岡本茂樹（2012b）：ロールレタリング　手紙を書く心理療法の理論と実践　金子書房 pp34-35.

斎藤環（2011）：「社会的うつ病」の治し方―人間関係をどう見直すか　新潮社　pp65-66.

竹下三隆（2001）：自分から自分へのロールレタリング　日本ロールレタリング学会第２回大会発表抄録集，38-39.

竹下三隆（2002）：面会で父親に反抗した少年にロールレタリングを実施した事例　日本ロールレタリング学会第３回大会発表抄録集　65.

※本研究は，平成23－25年度科学研究費補助金基盤（C）「受刑者に対するロールレタリングを用いた『教育プログラム』の効果の研究」による成果の一部である。

Psychological Support for a Prisoner with Drug Dependency Using Group Work with Role Lettering

OKAMOTO Shigeki [i]

Abstract : Guidance on withdrawal from drug dependency based on the theory of cognitive behavioral therapy is given to prisoners with drug dependency, but a program focusing on the viewpoints of victims is applied in murder cases. The purpose of this study is to investigate the effectiveness of the program focusing on the viewpoints of victims, which consists of both group work aiming at disclosing the real feelings, and Role Lettering, focusing on a prisoner with drug dependency, convicted of attempted murder. The prisoner began to feel the importance of a warm relationship with other prisoners through group work and noticed that he was addicted to stimulants that compensated for his loneliness by disclosing his negative feelings toward his brother, his father and so forth. In this process, he noticed that he had been hurt, understood the feelings of the victim deeply and finally learned the importance of being supported by other people. This case suggests the effectiveness of another approach for prisoners with drug dependency in addition to the program based on the theory of cognitive behavioral therapy.

Keywords : prisoner with drug dependency, program focusing on viewpoints of victims, Role Lettering, group work

i Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University